（別紙4）　　平成　24　年度

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要（事業所記入）】

事業所番号	1072300138		
法人名	特定非営利活動法人かがやき友の会		
事業所名	かがやき入野ホーム		
所在地	群馬県高崎市吉井町小暮568-1		
自己評価作成日	平成24年10月12日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。（↓このURLをクリック）

基本情報リンク先	http://www.kaigo-joho.pref.gunma.jp/

【評価機関概要（評価機関記入）】

評価機関名	特定非営利活動法人群馬社会福祉評価機構
所在地	群馬県前橋市新前橋町13－12
訪問調査日	平成24年10月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点（事業所記入）】

「『住み慣れた町で、いつまでも暮らしたい』そんな思いを力を合わせて支えます」の理念を掲げ、一人ひとりの尊厳を大切にしています。将来自分が入りたい、家族も利用させたい、という思いで、日々努力をしています。例えば、日頃より「受診時の家族へのお知らせ」を作成し、受診の際は本人の状態を家族や主治医に詳しく伝えられるようにしています。また、利用者が今、何をしたいか、悩んでいることは何かを、暮らしの中から見つけられるように努力しています。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点（評価機関記入）】

事業所は平成8年に開設され、県内で草分け的な存在である。運営推進会議の意義を十分認識し、会議を活かした取り組みに努めている。会議では、利用状況や行事などの運営状況や事故報告だけに留まらず、運営推進会議の役割と機能、市の介護保険事業計画（高齢者安心プラン）を議題とし資料を配布している。また、法人の営む隣接の事業所の利用者に関わる課題を、地域の生活者の問題として取り上げ、構成員から意見を聞き、運営に反映させている。事業所内では、入居者の重度化が進むなか、サービスの維持・向上を図る上での運営に関する諸課題について、代表者・管理者・職員が同じ目線で一丸となり、定期的な職員会議や随時のミニカンファレンスなどにおいて、風呂場の手すり・シャワー椅子の設置などいろいろな面で職員と共につくる運営体制となっている。

Ｖ．サービスの成果に関する項目（アウトカム項目）　※項目№1～55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる（参考項目：23,24,25）	○	1. ほぼ全ての利用者の
			2. 利用者の2/3くらいの
			3. 利用者の1/3くらいの
			4. ほとんど掴んでいない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある（参考項目：18,38）	○	1. 毎日ある
			2. 数日に1回程度ある
			3. たまにある
			4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている（参考項目：38）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている（参考項目：36,37）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている（参考項目：49）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている（参考項目：30,31）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
62	利用者は、その時々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている（参考項目：28）	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない

	項　目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている（参考項目：9,10,19）	○	1. ほぼ全ての家族と
			2. 家族の2/3くらいと
			3. 家族の1/3くらいと
			4. ほとんどできていない
64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている（参考項目：2,20）		1. ほぼ毎日のように
			2. 数日に1回程度
		○	3. たまに
			4. ほとんどない
65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている（参考項目：4）		1. 大いに増えている
		○	2. 少しずつ増えている
			3. あまり増えていない
			4. 全くいない
66	職員は、活き活きと働けている（参考項目：11,12）	○	1. ほぼ全ての職員が
			2. 職員の2/3くらいが
			3. 職員の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が
			2. 利用者の2/3くらいが
			3. 利用者の1/3くらいが
			4. ほとんどいない
68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が
			2. 家族等の2/3くらいが
			3. 家族等の1/3くらいが
			4. ほとんどできていない

自己評価および外部評価結果

〔セル内の改行は、（Altキー）＋（Enterキー）です。〕

自己	外部	項　目	自己評価 実践状況	外部評価 実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅰ.理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	「『住み慣れたまちで、いつまでも暮らしたい』そんな思いを力を合わせて支えます」の理念を掲げ、毎朝確認している。利用者一人ひとりが自然な生活のなか安心して暮らせるよう日々サービスの提供を行なっている。	職員は、毎朝出勤時に玄関に掲げてある理念を見て確認したり、申し送り時に確認したりしている。利用者本位の、その人らしいケアを基本に、理念を共有し、実践に向けて取り組んでいる。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	自治会に加入し、年2回の地域清掃活動にも積極的に参加している。近隣の保育園や小学校の園児や児童の来訪により交流する機会がある。また、年末には餅つき会を行い、地域の方にも参加を呼びかけている。	自治会の清掃活動に職員が参加したり、近隣の幼稚園児・保育園児・小学生が来訪し、歌を歌ったりの交流がある。また、年末の事業所の餅つき大会には、地域の人を交え100人くらい集うなど、地域との繋がりを大切にし、交流に取り組んでいる。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議の際に認知症や誤嚥性肺炎などの具体的な事例を話したり、地域に向けて介護相談会の案内などを出したりしている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2ヶ月に一度開催している運営推進会議では、利用者の状況報告の他にも、利用者や家族の抱えている問題なども報告し、運営推進委員の意見も取り入れるように心掛けている。	事業所の運営状況や事故報告を行い、情報開示と理解に努めると共に、運営推進会議の役割と機能について議題に掲げ詳しく説明したり、利用者に関わる事例を身近な問題として取り上げたりして、出席者から意見を聞き、運営に反映させている。	
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	市の担当者が毎回運営推進会議に参加しており、そこで事業所の実情や取り組みなどを伝えており、協力体制を築いている。	市担当者とは、運営推進会議でいろいろと情報交換をすると共に、手続き等で市に出向き相談するなど、連携を取りながら運営に努めている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束をしないケアを常に職員全体が理解している。また、「身体拘束廃止」の研修には毎年順番に参加している。玄関の施錠は夜間のみで、門扉は昼夜施錠せず、家族や近隣の方もいつでも訪れることができるようにしている。	職員が研修会に参加し、職員会議で報告するなどして共通理解を深め、身体拘束をしないケアの実践に向けて取り組んでいる。夜間、徘徊し転倒の危険性が高い入居者に、布団の両側に鈴をつけて対応しているが、身体拘束と捉えて家族の了解を得ている。身体拘束の解除に向け、代案検討と共に3ヶ月毎の見直しを行っている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	申し送り時に気付いたことを話合い、虐待防止に努めている。「虐待防止セミナー」の研修にも毎年参加している。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	利用者に1名、成年後見制度の利用者がおり、チーム会などで制度について勉強している。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約に際しては、事前に利用者や家族の状況、不安や疑問点などを十分伺った上で、サービスの内容を説明し、理解を得ている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	意見箱を設置しているが、家族の来訪時にはできるだけ時間をかけて話をしている。家族会を開き意見を出してもらい運営に取り入れる予定。介護相談員の受入も行なっているので意見収集の協力を仰ぎたい。	入居者には、本人の状況を見ながら話しかけ、ゆっくりじっくり時間をかけて意向を聞き、家族には、面会時に入居者の状況を伝えながら、意見を聞くようにしている。家族からの要望で、玄関にチャイムを付けた経緯もある。また、家族が意見を出しやすいように、アンケート実施などを検討している。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	ミニカンファレンス、チーム会などをとおして意見を聞き、改善に繋げるように心掛けている。	職員の意見を尊重し、反映させながら理念の実践をめざし、取り組んでいる。入居者の重度化が進むなか、サービスの維持・向上を図る上での運営に関する諸課題について、代表者・管理者・職員が同じ目線で一丸となり、職員会議やミニカンファレンスで、風呂場の手すり・シャワーチェアーの設置などいろいろな面で反映し、職員と共につくる運営体制となっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	チーム会などの職員の意見に触れる機会にできるだけ参加し、職員の考えや現状の問題など把握し、それを改善できるように心掛けている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部の研修会の案内があった場合には、全職員に告知し、必要と思われる研修にはできるだけ参加させるように努めている。また資格取得などの取り組みには勤務日を調整するなど、できるだけの支援をしている。		
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	地域密着型サービス連絡協議会の定例会や外部研修などに参加させ、他施設の職員との交流や意見交換などの機会を作っている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	事前の情報提供をもとに、本人の言動、表情等から困っていることを察し、小さな訴えにも耳を傾け、信頼関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居前後に家族や成年後見人と困ったことや、不安なことがないか電話や面会時に話を聞き、要望等に応えられるよう良好な関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	家族から本人の状態を伺い、何ができて何ができないのか、必要とする支援を見極め、センター方式の活用やカンファレンスを行なっている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	食材の下ごしらえや洗濯物たたみ等を、世間話をしながら一緒に行なっている。また、自室のモップがけや玄関の掃除など、出来る作業を行ない、生活者の一人と実感してもらえるように関係を築いている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	本人のニーズが何かを、家族と共に考え支援している。家族と出かける機会を作り、絆を大切にしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ドライブをしながら、住んでいた家を訪問している。同級生や友人、家族の関係を大切にし、面会も継続されている。	入居時やその後、本人や家族から聞き、馴染みの人や場所の把握に努め、支援に繋げている。以前住んでいた場所や馴染みのデパートに案内したり、友人が事業所を訪問の際には、認知症の手引きの冊子を渡し、理解を得ながら継続できるよう支援したりするなど、馴染みの人や場との関係が途切れないよう支援に努めている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとりの身体的、精神的状況を考えながら、席の変更を行なっている。食が進まない利用者への優しい声かけや、自分の子供のようにいたわる姿が見られている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用（契約）が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了しても、今後の介護について相談や支援を行なっている。		
Ⅲ．その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	「映画を見たい。」「髪を切りに行きたい。」「宝くじを買いたい。」等本人の希望に沿って実施できるように努めている。困難な場合も家族から元気なころの様子を伺い、介護計画に反映させている。	入居者の状況をみながら、ゆっくり時間をかけて本人の意向を聞き、映画鑑賞・宝くじ購入などできるだけ本人の希望に添うようにしている。また、困難な場合には、毎日の声かけや挨拶を通し、良好な関係をつくりながら、表情やしぐさなどを見逃さず観察し、把握に努めている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時にセンター方式を活用し家族から伺いながら、一人ひとりのこれまでの生活歴や馴染みの把握に努めている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	介護の中で常に、「できる力、分かる力」の把握に努めており、これまでできたことができなかったり、逆にできないと思っていたことができた時は、気が付いた職員がそのつどカーデックスに記録し、情報を共有している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイディアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の状態に変化が生じた場合は、朝の申し送り等の短時間でも、参加した職員でミニカンファレンスを実施し、現状に即した計画の変更をしている。、ケアマネは10日おきにカーデックスの日々の記録を確認し、月末にモニタリングしている。	職員は、介護計画のサービス内容を把握し、日々の入居者の状態を記録している。介護支援専門員は朝の申し送りに参加し、状態変化時にはミニカンファレンスを実施して、現状に即した変更を行っている。モニタリングは毎月介護支援専門員が実施しているが、今後は入居者の担当職員と一緒にモニタリングを行う予定である。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別の記録はそれぞれのカルテへ、日々の様子やケアの気づきはカーデックスに、そのつど記入し、職員間で情報を共有し、緊急の場合は朝の申し送りの場でミニカンファレンスを実施し、すぐに介護計画を見直している。		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々に生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	散歩を兼ねて、併設のデイサービスや有料老人ホームに出向き、一緒にお茶を飲んで過ごす事がある。また遠方に住む家族が面会に見えた時は、本人の部屋で一緒に泊って一晩過ごす事もある。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	買い物や理美容室、映画鑑賞など楽しめるよう支援している。幼稚園、保育園、小学校との交流を通じて楽しい時間を持てるようにしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切にし、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	受診は本人、家族の希望を第一に、かかりつけ医を決めている。受診の際は、ホームでの本人の様子を主治医に細かく伝えられるように「受診時の家族へのお知らせ」を普段より作成し、適切な診療を受けられるようにしている。	本人・家族の希望するかかりつけ医となっており、月1回訪問診療を受けている。専門病院への通院や歯科受診は家族送迎としているが、職員が支援することもある。受診時には書面による利用者の状態を家族に渡し、適切な医療が受けられるよう支援している。また、看護職員を配置し、介護職員は24時間いつでも看護師に連絡できる体制にしている。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	毎朝の申し送りや、日常の気づきを看護職員に伝え、健康管理、健康相談を行ない、適切な指導を受けている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	安心して治療ができるように病院関係者に詳しく本人の状態を情報提供している。摂取困難のため、一時外出をしてホームにて食事のリハビリを行ない、胃ろうにしない努力をするなど、家族、病院と協力し、連携を密にして、早期退院に向けた支援も行なっている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	入居時に「重度化対応に関する指針」を家族に個別に説明している。	重度化や終末期に向けた事業所の方針は、入居時に「重度化対応に関する指針」により、家族に説明し同意を得ている。重度化した入居者の看取りまで展望したケア体制を整える方針であり、具体的には入居者の変化に伴い、本人・家族の意思確認のもと、医師と話し合い、対応を検討し、事業所一丸となり支援している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	手当・対応マニュアルを活用し、通報の練習等を重ね、迅速に行動できるよう努力している。また、消防署の協力により、救命救急講習や初期対応の訓練を行なっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	消防署立会いの避難訓練を行ったり、避難の仕方など話し合う機会を持っている。地域との協力体制はまだ築けていない。	年に2回、消防署立会いのもと、夜間想定を取り入れ、マニュアル的なものを作成し、初期消火・通報・避難誘導の一連の訓練を、入居者参加により実施している。そのほか、日中に避難方法等個別の訓練を行っている。地域との協力体制については、検討課題となっている。	隣接する法人の事業所との連携強化と共に地域との相互協力体制について、引き続き構築に向けて検討することを期待したい。

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
Ⅳ．その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	一人ひとりの気持ちを大切にし、プライドを傷つけないように配慮している。申し送りの時には、利用者の名前をイニシャルや愛称に変えてプライバシーを確保している。	本人のできないことも、本人の気持ちを受け止めながらプライドを傷つけないように配慮している。また、ホールでの申し送りの際には、会話の中で入居者の名前を用いる場合は、イニシャルや愛称に変えて表現するなど、プライバシーに配慮している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	家族の面会時、妙義山にドライブに行ったり、畑道を一緒に散歩したりしている。床屋に行きたいなどの具体的な希望があれば出かけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切にし、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの体調に合わせて、散歩や日向ぼっこをして気分転換をしている。自分が居たい場所に自由に行き来している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	家族や職員と一緒に理美容室に出かけ、散髪している。職員と一緒に洋服選びをしている。朝は鏡の前で身だしなみを整えている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食べたい物を聞いて、その日の夕食に提供したりしている。食事が楽しみになるように味見をしてもらう。食材の下ごしらえを職員と一緒にしたりする。	委託先の管理栄養士が作った献立に基づいた食材が、毎日配達される。事業所では、状況に応じアレンジしたり、季節の物を取り入れたりしながら、職員が交代で調理している。入居者は、下拵えなど能力に応じ職員と一緒にし、職員も同じものを一緒に食べている。入居者の希望で外食に出掛けたり、出前を取ったりするなど、食事を楽しむことができる支援をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	栄養バランスについては、外部の栄養士に委託している。水分摂取表を用いて、全員の状況を把握している。持ち易い食器にしたり、器の色を変えたりして、気持ち良く食事ができるよう支援している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、歯磨きをしている。歯磨きが難しい場合は、緑茶を使って口腔ケアをしている。口腔内の残渣物を確認するなど、誤嚥性肺炎の予防に努めている。		

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	一人ひとりの排泄パターンを把握し、日誌に時間の記録を取り、その人に合わせた誘導を行なっている。夜間などは本人と相談して声かけをするなど、自立に向けた支援を行なっている。	排泄表に記録し、一人ひとりの排泄パターンを把握し、適宜声かけし、トイレ誘導している。また、夜間は、本人と相談し、声かけしたり、必要に応じポータブルを用いたり、個々人の状況に対応し、トイレでの排泄や排泄の自立に向けた支援を行っている。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	水分や繊維質、果物を摂取するよう心がけると共に、毎日午前中に牛乳を飲むように工夫している。また、排泄の周期を把握し、ポータブルトイレに座って排便を促している。散歩、階段昇降、足踏みなど、運動を取り入れている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めてしまわずに、個々にそった支援をしている	毎日入浴を実施している。本人の希望に合わせ、入浴日や湯加減など楽しめるように配慮している。冬期には、家族や近所から柚子を沢山頂き、柚子湯を楽しんでいる。また、近くの日帰り温泉に行き、気分転換をしている。	毎日入浴を実施し、本人の希望に合わせた入浴ができるよう配慮している。入居者の状態に合わせ、浴槽に入らずシャワーと足湯を組み合わせたり、浴槽内に椅子を用意したりするなど、入居者が安心して快適に入浴できるように工夫している。また、冬期には柚子湯を提供したり、近くの日帰り温泉に出掛けたりするなど、入浴を楽しむことができる支援に努めている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	その人に合わせたベッドや布団を用意し、クッションを入れたり角度をつけたりして気持ち良く休めるように支援している。眠れない人には、しょうが湯などを提供している。足浴をしたり、湯タンポを使用したり、室温の調整も行なっている。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	個人記録に薬状をファイリングし、いつでもすぐに確認できるようにしている。服薬に変更があった場合は、カーデックスに記録し、全員で共有している。少しの体調変化も見逃さないよう記録に残し、看護職員や主治医に相談している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	映画好きな利用者は希望の作品を観に映画館へ行ったり、観たい作品をホームで観ている。買い物や庭でバーベキューをしたり、地元の温泉施設にも行き、生活にハリや楽しみを感じられるように支援している。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	自宅訪問し、近所の人と懐かしい会話をしたり、お正月には、重度化した方でもホームで送迎して一時帰宅している。また、通い慣れた店に出かけたり好物を買ったりなど、本人の希望を実現させるための支援をしている。	日頃、近所を散歩したり、居間からそのまま出られるベランダや屋外のベンチで休んだりして、気分転換を図っている。季節の花見・外食・日帰り温泉などの外出行事を企画し、一緒に出かけている。また、自宅訪問・映画鑑賞・デパートでの買物・カットなど、一人ひとりの希望に添った外出支援を行っている。	

自己	外部	項　目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	散髪などに出かけた時、日用品の買い物や宝くじを買うことを楽しみにしている。自己管理が難しい場合は、ホームで預り、出かけた時などに、本人が支払いができるよう支援している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	希望に応じて電話を取り次いでいる。手紙のやりとりを代筆したりすることで補ったり、年賀状に一言添えてもらったり、家族や兄弟などとのやりとりが継続できるように支援している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激（音、光、色、広さ、温度など）がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	中庭には季節の花が咲いている。今年の夏は季節感と涼感を出すグリーンカーテン作りに挑戦した。食堂のテーブルには、家族や職員が持ち寄った花が飾られている。天窓の光が強いので、布をかぶせて調整している。	居間兼食堂には、ソファー・ピアノが置かれ、テーブルには季節の花が飾られている。居間からはベランダに出られる。また、廊下等の壁には、外出行事のスナップ写真などが飾られ、親しみのある居心地よく過ごせる空間となっている。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	自席以外に、外が見えるソファや一人掛けの椅子を用意している。一人の時間や気の合った利用者同士で外を眺めている。ウッドデッキでお茶を飲んだり、日光浴を楽しんでいる。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	自宅で使っていたタンスを使用したり、ベッドではなく布団で寝たり、それまで送ってきた生活を維持する支援をしている。毎朝、位牌に御飯と水をお供えするなどの習慣も継続できるよう配慮している。壁には家族と撮った写真が飾られている。	居室は、入居者の希望により、ベットや布団となっている。居室には、使い慣れたタンスや机などが持ち込まれている。また、家族の写真・人形・折り紙が飾られ、亡くなった家族の写真の前に毎朝水やご飯をお供えしているところもあり、入居者一人ひとりが居心地よく過ごせるような工夫をしている。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの場所が分かるように貼り紙をしたり、段差で転ばないように色テープを貼ったりして、分かりやすくしている。家具配置を調整し、手すりをつけて安全に歩行ができるようにしている。		